

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 13 日現在

機関番号：12701

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2016

課題番号：25381173

研究課題名(和文) ブータン王国における新教科“Art”の導入と受容に関する調査研究

研究課題名(英文) Art education in the Kingdom of Bhutan -Introduction and reception of new subject "Arts" in the elementary course-

研究代表者

大泉 義一 (Oizumi, Yoshiichi)

横浜国立大学・教育人間科学部・准教授

研究者番号：90374751

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,000,000円

研究成果の概要(和文)：ブータン王国は、国の豊かさを図る質的な尺度、「GNH：Gross National Happiness / 国民総幸福量」を提唱したことで世界的に注目されて久しい。本研究においては、3度の現地調査を通して、ブータン王国がナショナル・カリキュラムに新教科“Arts”を2013年に導入し、試行実施を行いながらその教育効果を検討している状況を調査している。その結果、子どもの創造性を培うという我国と同様な目的を有しながらも、その実現手段においては困難に直面していることを確認し、その克服のための手段を構想することから、我国の造形教育に対する示唆を見出している。

研究成果の概要(英文)：A qualitative standard to plan the richness of the country in the Kingdom of Bhutan is a long time since and "GNH attracts attention in what I proposed with Gross National Happiness/ gross national happiness quantity" worldwide. In this study, the Kingdom of Bhutan introduced new subject "Arts" into a national curriculum through 3 degrees field work in 2013 and investigated the situation that examined the education effect while trying it, and carrying it out. As a result, I got a suggestion for the molding education of our country because it was difficult and confirmed what I faced in the realization means while having the purpose that was similar to our country to cultivate the originality of the child and envisioned means for the conquest.

研究分野：美術科教育

キーワード：ブータン王国 造形教育 GNH カリキュラム デザイン教育

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成29年5月8日現在

### 1. 研究開始当初の背景

現在、教育に関する国際的な話題として取り沙汰されているのは、OECD（経済協力開発機構）が実施した「生徒の国際学習到達度調査」（PISA）の学力調査の結果であろう。そこでフィンランドが義務教育として世界第一位の評価を得て注目されたことは記憶に新しい。その後、2010年には国としては参加していない中国から都市として初参加の上海が、読解力、数学的応用力、科学的応用力の全てでトップとなり、中国大都市圏の教育レベルの高さを国際社会に見せつけた。しかしながらこれらの論議は、欧米の先進国を中心とした国際経済全般を検討することを目的としたものである。そもそもOECDは、“先進国クラブ”と呼ばれることもあることから、いわゆる“経済中心”の社会観に基づく論議なのである。

ところで、こうした社会観に対して異を唱えているのが、ブータン王国（Kingdom of Bhutan）である。ブータン王国は、ヒマラヤの麓に位置する人口65万人、面積47,000㎡の立憲君主制の小国である。その国土は標高300m～7,500mと多様性に富み、日本と同様に四季がある。首都はティンブー（Thimphu）。その国民の約7割が米を中心とした自給的な暮らしを営んでいる。宗教は仏教であり、公用語は英語と母国語であるゾンカ語であるが、小・中学校の授業では主に英語が使われるため、若年層では英語中心のコミュニケーションが行われる傾向にある。ブータン王国の名を世界に知らしめたのは、「GNH」という言葉の概念である。「GNH」とは、「Gross National Happiness」の略語であり、和訳されると「国民総幸福量」となる。これは、ブータン王国の若き第4代国王、ジグメ・センゲ・ワンチュク（Jigme Singye Wangchuk）が、1976年にコロンポで開催された第5回非同盟諸国会議において“GNH is far more important than GNP. (GNHはGNPよりも重要である)”と発言したことから生まれた概念である。GNP（国民総生産・Gross National Product）が国の豊かさを数値化して示すのとは異なり、GNHは国民全体の幸福度を示す尺度であり、経済的豊かさを中心にした物質社会への警鐘を鳴らす概念として注目されたのである。

以上のように、ブータン王国という小国が目指す社会のあり様とは、上記GNHの要件を眺めてみてもわかるように、私たちが生きることに對する意味や価値に対する質的な側面を重視し、かつそのことを実現しようとする開発的アプローチと検証方法も質的である。そうした、一種非合理とも見える丁寧な歩みの積み重ねの上に、国家の未来をつくり

だしていこうという理念を見て取ることができる。そしてそれは教育においてもまた然りであり、その様態は、冒頭で紹介したような教育をめぐる言説とは一線を画している。

### 2. 研究の目的

ブータン王国は、世界から注目されているヒマラヤの麓に位置する小国である。なぜならば国の豊かさを図る尺度として数量的な「GNP/国民総生産」ではなく、「GNH: Gross National Happiness/国民総幸福量」という質的な尺度を提唱しているからである。そして実際に9割を超える国民が「今、幸せである」と答えるという。研究代表者は、2度の現地調査を通して、そのブータン王国のナショナル・カリキュラムに、2013年度から新教科“Arts”が導入されるという情報を得た。本研究は、その新教科“Art”の導入の経緯と教科内容の詳細および理念を明らかにするとともに、教育現場の受容状況を分析することで、我国の造形教育に対する示唆を得ることを目的とする。

### 3. 研究の方法

- (1) 新教科“Art”の導入の経緯と教科内容の調査
- (2) 新教科“Art”に対する教育現場の受容状況の分析
- (3) 我国の造形教育に対する示唆の考察

### 4. 研究成果

- (1) ブータン王国の教育について  
 教育の概観 ブータン王国では、GNHの重要な柱の一つである文化の保護及び振興のために、教育制度の拡充を国の最優先政策のひとつとして掲げている。その教育に関しては、首都圏パロ（Paro）にある教育省が全土の教育行政を所管している。全土に設置されている学校は一部の私学を除き、この教育省の直轄であり、授業料、教科書、文具、宿舍、制服、交通費、スポーツ用品、医療費などはすべて無償である。学校制度は、6-2-2-2制である。まず6歳が学齢下限となっている就学前教育（Class PP・Pre Primary school）が1年間位置付いている。実際に通う子どもは、年齢制限が下限であるために、6歳よりも高齢の子どもが在籍していることもあるし、その逆に年齢を偽って6歳以下の子どもが入学していることも多いという。初等教育は7歳からの6年間（Primary school）、中等教育は2年制の前期中等学校（Lower Secondary school）、2年制の後期中等学校（Middle Secondary school）であり、ここまですべて基礎教育レベルとして考えられている。その後の2年制の高等学校（Higher

Secondary school), 4年制の単科大学 (College) や3年制の教員養成所などは個人選択である。学年は第1学年から12学年 (Class ~ Class XII) まで通して呼称されている。2003年には、ブータン総合大学が設置され、多くの教育機関が統合されつつある。

教育の普及状況 先述したように、ブータン王国の教育はすべて無償であるにもかかわらず、その就学率は近隣国と比較しても決して高いとはいえない。その理由には、通学範囲が広すぎることで、移動生活を行っている遊牧民がいることや、現在でも特に地方では、一家庭から子ども一名は各地の寺院に修行に出ることが慣習になっていることなどがある。

教育課程 教育課程は、全学年を通じて英語とゾンカ語、数学とモラル教育の4教科が必修科目である。加えて Class から までは理科があり、Class , では理科に代わり、物理、化学、生物、コンピュータの4教科が位置付く。また Class PP, そして Class から までは環境教育、Class から までは社会科、Class から までは歴史と地理があり、Class , には経済の教科が位置付けられている。さらに学校裁量の教科として、音楽、体育、図画工作(造形)、社会奉仕などがある。日本の図画工作・美術科に相当する教科は、初等中等教育を通じて、学校裁量の教科ということである。

## (2) ブータン王国における造形教育

先述の通り、ブータン王国においては、造形教育は学校教育の必修教科として位置けられていない。そこで本研究では、以下の造形教育の実践を現地視察調査の対象とする。第一に、伝統美術を専門に学ぶ伝統技芸院 (Zorig Chusum・ゾーリン・チュスム)、第二に就学前教育 (Class PP) を含む初等教育の授業実践(そこで扱われている造形表現)、第三に学校教育外の NGO による造形教室である。以上三つの教育現場における造形教育実践の実態を明らかにすることから、GNH と造形教育との関係性を検討してみたい。

伝統技芸院 (National Institute for Zorig Chusum・ゾーリン・チュスム)

1) 伝統技芸院の概要 ブータン王国の伝統美術を専門に学ぶ伝統技芸院は、首都ティンブプ (Thimphu) の小高い丘の上にある。先述したように、ブータンではGNH実現のための政策の一つとして伝統文化の保護と継承を掲げている。本院はその政策を担っている教育施設の一つである。4~6年制の寄宿制で、他の学校教育と同様に授業料や寄宿費用は無償である。生徒数は約250名である。ブータン王国には伝統技芸として保護・継承されるべき以下の13領域があり、本院においても、これらの技術をそれぞれの専攻の教室で教授している。

1.竹細工 2.木細工 3.織物 4.金・銀細工  
5.塑像 6.鋳造 7.紙細工 8.絵付け

9.刺繍 10.建築 11.木彫り 12.鉄工  
13.漆

2) Jigme Dorji 学校長へのインタビューから (2011年3月8日)

- ・教育の目標について 伝統美術に関する知識と技術を教授し、生徒達がその後の進路を決定するために必要な能力と資格を与えることが目標である。本院を卒業した生徒は技術を身につけることができるので、就職先は、寺院、家屋の装飾絵師、工芸師、そして本院の教員など、恵まれている。
  - ・授業実践について 実技の授業では、教師が描き方や制作方法を提示し、生徒がそれを模倣するという学習形態が中心である。とりわけ下学年の段階では、「かたちを正確に描く」指導を重視しており、『コンピテンシー・ベース・トレーニング』という学習方法を採用している。これは専攻・学年ごとの学習内容に達成すべき課題を設定し、生徒がそれをクリアすると次の学習へとステップが進行していくものである。
  - ・小・中学校との連携について 小・中学校では伝統的な模様を描く学習が多く行われており、その経験が基になって本院に入学してくる生徒も多い。また水曜日や土曜日の午後に「クラブ活動」の時間を置いている学校が多く、そこに『Art club』が設置されていることもある。そこに本院の教員がゲスト・ティーチャーとして招かれ、特別授業を行うこともある。こうした取り組みは、子どもたちに伝統美術に対する興味・関心を抱かせることができるので、伝統美術の継承のために極めて重要であると考えている。今後はより多くの小・中学校に足を運ぶことを希望している。
  - ・GNHとの関係について 本院の教育活動とGNHの考え方には、もちろん密接な関係がある。すなわち「文化の保護と伝承」においてである。GNHの実現のためにも、本院が開設している13の専攻すべての発展が求められている。ゆえに、生徒達が本院で身に付けた伝統美術に関する技術が、自分の生活収入のためだけでなく、国家のアイデンティティーを保護し発展させていくものなのだという自覚をもたせることが重要である。自分の手によってつくられたものが寺院や街に設置され、人々の生活の中に位置付くが故に、強力な発信性、メッセージ性を有しており責任は重大なのである。
- 3) 授業の参観と教員へのインタビュー (2011年3月9日) 中心的に参観したのは、「塑造」と「絵付け(仏画)」の教室である。参観しながら何人かの生徒にインタビューし、さらに「塑造」の教室では、指導している教師にその場でインタビューすることができた。
- 僧侶になるよりも仏像を制作する方が御利益があると指導している。そもそも仏像の

形態の一つ一つの意味は経典に掲載されているものである。つまり造形と信仰は一体化しているのである。本院の生徒達も朝、昼、夕方と経を唱えている。そして主要な造形材料である「土」は万物の基となるものであり尊いものであると考えている。以上のような仏像制作に込められた意味を知ると、生徒達はより高い関心・意欲を示すようになるのである。

4) 考察 伝統技芸院は、まさに GNH という概念を教育において実効化する重要な位置にあると言える。我国の図画工作・美術科の教育と比較して特徴的な点は、以下の3つにまとめることができるだろう。一つ目は、造形教育の目的が GNH の「文化の保護と伝承」と合一であること、したがってその教育内容は、ブータン王国の伝統として規範化されているもので、保護や奨励の活動なくしては消滅が危惧される技術や知識などを対象としている。そして当然ながらそれらには仏教としての厳格な思想が内在している。二つ目はその学習が学習者のキャリアに直結していること、三つ目は、その教育方法が、主に知識や技術の教授にあるということである。これらは先述したように、GNH の政策との関連があるためである。

以上のように、本院では「造形」と「信仰」を統合させた教育が行われていた。そこでは、「造形」という表象的側面よりも、それを「造形する」という営為自体に対する意味が重視されているのである。そしてそのことを個人的な能力に還元するというよりも、仏教や自然を含めた自他を切り結ぶ「信仰」という関係性の中でとらえているのだと言えよう。

ジグメ・ロセル小学校 (Jigme Losel Primary School)

1) ジグメ・ロセル小学校の概要 現在、ブータン王国の教育省は、学校教育現場への外部者の参観・訪問を制限している。今回の訪問は、現地観光業者と学校長との直接的なアポイントで実現した。ジグメ・ロセル小学校は、首都ティンブーの中心街にある 1990 年設立の学校である。全校児童は、男子 426 名、女子 438 名であり、教員数は 33 名である。中級家庭の子どもが多く通っており、同じ敷地内に中学校もある。学校長は Choki Dukpadearu 氏である。『ジグメ・ロセル小学校の改善計画』によれば、2010 年度の学校経営目標は、“Be a center for excellence in Primary Education.” であり、ブータンの初等教育において先進的な取り組みを行っている小学校である。そしてそのためのミッションは、「基礎学力と ECCA プログラム (環境保護促進拠点プログラム・Environmental Camps for Conservation Awareness Program) のバランスをとることによって良質な教育を提供すること」、「すべての子どもたちに年齢と性別に関係なく均等な学習の機会を提供すること」、「日々の基礎的な学習において思わしくない成績の子どもには、タイムリー

な支援と指導を行うこと」が挙げられている。

2) 教育活動の参観 (2011 年 3 月 9 日) 朝の 8 時過ぎにはブータン王国の正装である“ゴ”や“キラ”を着た子どもたちが登校してきた。子どもたちは外国人に興味があるらしく、恥ずかしがりながらも筆者に話しかけてきた。その際、みな流暢な英語を使っていた。Class PP の英語の授業では、アルファベットはもちろん、日常会話の発声練習、歌や体操が行われていた。どの教室の授業でも、30 名ほどの子どもに対して、教師から子どもへの教授活動が中心の学習指導が行われていた。

3) 学校長へのインタビューから (2011 年 3 月 9 日) 学校長である Choki Dukpadearu 氏は、小・中学校長としての経験が豊富なベテラン教師であり、教員研修会のリーダーとしての役割を果たすことも多いという。

・GNH 実現のための取り組みについて 教育省から『GNH program』が提唱され、徐々に教育現場に伝播しつつある現在においては、教員研修のあり方が最重要課題となっている。当校においても、このプログラムを基に教員研修を行っている。その結果、教員の相互扶助の関係性が構築されてきている。教科書は以前からのものを使用しており、教育内容は変わっていないが、教育の前提となる「学校で学ぶことの意義」について深く考えることから学習を始めている。

以上のように、GNH の実践化には、そのためのカリキュラムやプログラムの開発に加えて、教師が GNH の視点から自身の教育実践を見直していくことが必要とされている。そしてそれは授業のみならず、学校生活全般に渡って実行されるので、保護者の協力的参画が増えてきている。

・教育実践における GNH の具現化について 先述したように、全学年において「学校で学ぶことの意義」というテーマで学習に取り組んでいる。校内の掲示板には、そのテーマに対するレポートを英語とイラストレーションでデザインしたポスターが掲示してあった。この掲示板には、“Sharing Time” という名称が付されている。“Sharing Time” とは、2008 年から始められたジグメ・ロセル小学校における GNH に基づく教育実践の一つである。この学習では、表 2 のように全学年に対して年間を通じて設定されている課題に対して、子ども自らが学んでいく。そして学んだことを掲示物などにまとめ、セッションを行うのである。例えば、気になった新聞記事についてグループで調査し、その結果を交流する学習などがある。そしてその過程では保護者も協力したり、ティンブーの街で地域の人と関わったりしながら学ぶのである。

この活動では、Sharing する手段として造形表現が位置付いている。そしてそれは自己表現の学習ではなく、Sharing を目的とした

デザインとしての学習であると言える。

4) 考察 以上の参観及び学校長へのインタビューからは、ブータン王国の教育が、インドの影響を受けてきたこれまでの教育からGNHの理念に基づく方向性へとシフトしつつあることを予感させる。特に“Sharing Time”で行われている教育実践は、学習者中心型の学習であり、教育省から提唱された理念を基に、各学校教育現場で特色ある教育活動を展開しようとしている様子は、まさに我国の「総合的な学習の時間」における教育実践と重なる。そしてこうした教育実践には、そのプロセスに造形表現が位置付いている。それは“Sharing”という人と人、人とモノ、さらには人と自然などといった「関係性」を構築するための一手段として位置付いており、デザイン学習としての様相を呈している。

非営利芸術組織“バスト・ブータン”(VAST Bhutan)

1) “バスト・ブータン”の概要 “バスト・ブータン”は、ブータン王国におけるContemporary Artを中心とした芸術の振興を進めようとしているNGO組織である。1998年に有志のアーティストたちによって結成されたこの組織の活動拠点(ギャラリー兼アトリエ)は、ティンプーの中心街にある。この組織は、伝統美術が政府によって保護されているのに対して、現代美術がブータン国内に根付いていないことを鑑み、その紹介と振興を図るために結成された。現在取り組んでいる活動は、「若手アーティストへの支援」、「青少年の創造性育成」、「芸術への参画を通じた潜在的な職能開発の機会提供」、「芸術を通じた豊かな文化と伝統の重要性の主張」、「芸術を通じた国際的な交流の促進」などである。

2) Kama Wangdi氏へのインタビューから 本組織の主宰者であるKama Wangdi氏に、学校教育との連携の状況についてを中心にインタビューを行った。本組織では、Contemporary Artを中心的に扱いながらも、仏画などの伝統美術に対しても高い評価を与えており、ブータン王国の伝統的な芸術様式を批判する立場を取ってはいない。むしろブータン固有の伝統美術の伝承のために、子どもたちの創造性の育成に取り組んでいるのだとも言えよう。

GNHと造形教育の関係

1) 王立ブータン大学研究員 Changa Dorji氏へのインタビュー(2011年3月8日) 王立ブータン大学で教育経営を研究しているChanga Dorji氏にインタビューを行った。氏の立場からみた、ブータンにおける造形教育の全体像を語ってもらった。氏がとらえている造形教育のあり様は、これまでに見てきた教育現場の様相と多くが一致している。特に明快に提示された3つの分類が興味深い。ブータン王国における造形教育は、当然ながらGNHの理念に基づいて実践されている。そしてその理念の背後にあるのは、他でもない仏

教に対する信仰である。その信仰こそが、芸術文化を語る際には相対する概念として扱われがちな「伝統」と「革新」という立場を統合・融合しているのである。

### (3) 結論

ブータン王国における造形教育の意義

これまでの調査および考察から、ブータン王国における造形教育の意義は、次のように整理することができる。

ア 伝統美術の保護と継承のための教育

イ 仏の教え(信仰)を通じた教育

ウ 主体的な問題解決を促す教育

エ 関係性を構築するための教育

オ 新しい意味や価値を生成するための教育

「ア」は伝統技芸院で見たような職能開発と関連付けられた実践としての意義である。それに対して「イ」はかねてから存在している仏教に対する信仰と造形とが融合している理念的実践としての意義である。「ウ」と「エ」は主に学校教育における意義であり、必ずしも造形表現として独立したものではなく、子どもが主体となった学習プロセスにおいて「関係性」を構築するためのデザイン学習としての意義である。そこでは、「伝統」(ブータン王国に固有な価値・規範)と「革新」(現代化における新しい意味・価値)の狭間にあるブータンの未来を創造していく子どもたちが、複雑な関係性の中で問題解決を図っていくために必要な能力の育成が目指されている。「オ」は、「ウ」と「エ」における能力発揮の結果もたらされるものであり、学校教育外における教育実践にも見られる可能性としての意義である。

示唆

では、これまで明らかにしてきたブータン王国における造形教育のあり様は、我国の造形教育に対して、どのような示唆を与えてくれるのであろうか。

第一に考えられることは、造形表現に対する「精神性・mentality」の所在である。第二には、「伝統と革新のバランス」が挙げられよう。そして第三には、「関係性・relationship」を重視したデザイン教育としての意義である。

以上のように、ブータン王国における造形教育のあり様からは、我国の図画工作・美術科教育の視点が、いかに「個」に重点を置いたものであるかを浮き彫りにさせる。そしてそのことに対して、個人主義的目標論からの脱却の必要性を示唆しているのではなからうか。さらに内容論においては、「美術」という概念を次のように拡大する。すなわち「美」や「造形」そして「表現」とは、形而上学的な存在であると同時に、わたしたちが生活しているいま・ここに存在しているものでもあるのだ。それはデザイン的な造形観であり、そこには常に“他・他者”が存在している。さらにそこにある関係性とは、“デ

ザイナーとユーザー”という主従的な関係ではなく、自然や文化をも包摂したホリスティックな関係性である。ここにおいて、関係性そのものをつくりだしていこうとするあらたなデザイン教育の意義と可能性を見出すことができるのではなからうか。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計6件)

大泉義一, デザインする子どもたち, 教育美術, 査読無し, 77 巻, 2016, pp.30-33

大泉義一, 「子どもがデザインする」ということ, デザイン学研究特集号: 日本デザイン学会誌, 査読無し, 24 巻, 2016, pp.42-45

大泉義一, ブータン王国の造形教育, 美術教育学研究, 査読有り, 48 号, 2016, pp.97-104

大泉義一, ブータン王国にみる造形教育の方向性, IRCN, 査読無し, 11 巻, 2015, p.16

大泉義一, ブータン王国の造形教育, 美術教育学研究, 査読有り, 45 号, 2015, pp.71-78

大泉義一, ブータン王国の造形教育, 美術教育学研究, 査読有り, 44 号, 2014, pp.127-134

〔学会発表〕(計3件)

大泉義一, 図画工作・美術科における「社会に開かれた教育課程」-その実践に向けた視点-, 美術科教育学会, 2017.3.29, 静岡県コンベンションアーツセンター

大泉義一, Art Tool Caravan, Neo Japan Neo Azia 2014, 2014

大泉義一, ブータン王国の造形教育, 美術科教育学会, 2011

〔図書〕(計1件)

大泉義一, 日本文教出版, 子どものデザイン その原理と実践, 2017, 536 頁

〔その他〕

・大泉義一研究室ホームページ

<http://www7b.biglobe.ne.jp/~oizumi-labo/>

## 6. 研究組織

(1)研究代表者

大泉 義一 (OIZUMI, Yoshiichi)

横浜国立大学・教育人間科学部・准教授

研究者番号: 90374751